

## 六 富に處して貧を忘れず

昔は「名利」の二字を高く額に掲げて、以て自修の師とせられた聖者もあつた。母の紡いだ古い糸車を、床に飾つて出世の祝の、唯一の寶とした孝子もあつた。今の世、自ら富貴に居て、曾て貧賤なりし折を忘れぬ者、果して幾人あるか。身に一錢の貯蓄ある時、曾てこれだにかりし事を思ふ者、果して幾人あるか。幾多無量の恩恵を蒙つて居ながら、常に私は忘れ勝である。浅間しい、勿體ない。「親の財産あてにすりや、薬罐頭が邪魔になる、入れて置きたい火消壺、怒る度びに蓋をする」とは随分下らぬ事を云ふたものであるが、實際左様な形跡がないでもない。強ち親の財産でなくとも、自分の懐が少しでも温もれば、徐々我慢と自惚が出かける。三宅雪嶺博士かつて曰く。言葉の末に「れ」の音のつくので、三つ戒むべき事がある。一に自惚れ、二に兵子垂れ、三に不貞腐れである。自惚れは、力に餘る事を敢てして遣り損ひ、兵子垂れは、出来る事をも爲さずに止めて仕舞ひ、不貞腐れは、自惚れであつて、兵子垂れるやうな結果になるのである。何れも戒むべきであるが普通に自惚れが最も戒められてある。自惚と瘡氣の無い者はないと云ふ、通り言葉になつて居るが、瘡氣のない者は素よりある。自惚のない者もあるのである。が、自惚は解釋次第、何人にもあるべきであつて、或は有る方が善い事にもなる。普通に自惚と云ふは、文字の通り、己自らに惚れるのである。惚れては、痘痕も靨となる如く、己自らに惚れては、己自らの欠點が解らなくなる。他人から見れば欠點が明かであるのに、己自ら氣がつかず、さも得意然として居る事である。己が解らなければ人が見ても解らない勘定になる。そこで自惚の強い者は、没分曉漢と云ふやうな意味合で悪い者になる。中にも己自らの外、誰でも解るのは器量自慢である。器量は誰でも目で見て

直ぐ解る。然るに當人は一廉善い積りで、色男を氣取つたり、美人のつもりになつたりする。人に解り易いだけ、器量に於ける自慢は笑はれる。實際氣取の随分可笑しいのがある。その他、お金自慢、力自慢、智慧自慢、種々にあるもの……。

或男が御馳走によばれて、吸物椀の蓋をとる。汁が甘たるさうで水臭い。

同席の主人「これはしまつた失禮でした」と、臺所から白い物を持つて來て少し入れてくれたので、とんだ甘しい吸物になつた。男はつくづく感心して「さてく美味しい、主人それは何と云ふものでござる」。「これですか、これは鹽です」。「成程、鹽ならばたと拙宅にもござる、よし」と獨うなづいて、家に歸るなり、勝手許で鹽瓶を見出し、「あるくどつさりある、少し許り水に入れてさへ、あんなに美味しいのに、正味なら尙好からう、頬べたが落ちさうな」と、一握りウンと頬張つた處、辛いとも苦いとも、口はヒリヒリ涙はポロポロ、息もならぬ破目にあひましたとや。